

## 自我体験に関する縦断面接調査

— 3年後の報告 —<sup>1)</sup>

天 谷 祐 子<sup>2)</sup>

### 問題と目的

「私はなぜ私なのか」「私はなぜ、他の時代ではなく、この特定の時代に生まれたのか」といった「私」への「なぜ」という問い—自我体験—は、小学校半ばから中学にかけて生起する現象である。この自我体験は、天谷(2002)の中学生を対象とした面接調査結果や、天谷(印刷中)の中学生から大学生を対象とした質問紙調査結果から、約半数の人に生起する現象であることが示唆されている。

これらの調査は、被調査者に過去を振り返ってもらい、そのような体験を経たかどうかという形でその報告を収集している。この方法による調査では、調査実施時点における被調査者の体験の意味付けの程度によって、報告のされ方が異なる可能性がある。また、発達に伴い、その人にとっての重要な出来事が変化することで、その後その内容に変容や忘却が見られることが予想される。Spranger (1924, 土井訳1973)は青年時代の情熱と悩みは、自分がその中に立っているうちは無限に重要のように見えるが、後年にはしばしば忘れられてしまうと指摘している。また、北村(1977)は青年期の動揺が後年になって、当時とは著しく異なる意義を持つ場合や、ほとんど無意味に思われることもあると述べている。さらに、植之原(1993)は、大学生を対象に自我同一性地位によって過去経験の記憶の詳しさを具体性が異なることを見出している。つまり、自我体験についても、最初の自我体験の後何度も体験された場合や時間が経過した場合、最初の自我体験の内容とは全く異なる形に変容したり、体験の持つ意味が変化したりすることが想定される。

このような点を縦断調査により検討することは非常に重要である。

また、被調査者に過去を振り返ってもらい、そのような体験を経たかどうかという形でその報告を収集する方法は、調査実施時の被調査者自身の過去の記憶に依存したものとなる。よって、被調査者が体験当時の内容を忠実に記憶しかつ保持したものを報告しているかどうかは疑わしい。しかし本研究では、得られた報告を体験当時の内容を忠実に記憶したものとしてではなく、調査時において過去の体験を被調査者がどうとらえているかといった位置づけで検討すべきであると考えられる。この点について榎本(1998)は自伝的記憶(自己物語として構成された自分史としての記憶)は主観的に構成されるものであり、現実には忠実ではありえないが、大事なものはそれが本人によってどのように受け止められているかであり、そうした心的現実のもつ意味を過小評価すべきでないとして述べている。本研究でもそのような立場に立つものである。

しかし、このような立場を取るにも関わらず、過去に存在しなかった体験を後に「体験した」と報告したり、過去に体験を経たにも関わらず完全に忘却し「体験していない」と報告したりする場合は、自我体験の体験率や調査そのものの信頼性に関わる問題となってくる。自伝的記憶の忘却については、Linton(1982)は自身の日常生活における出来事を記録し評定するという実験を行い、項目が書かれて1年以内の忘却比率は1%以下で、2年目以降は毎年5~6%の安定した比率で忘却が生じていたとしている。また、Barclay(1986)は、学生に書かせた記録を1年後、2年半後に自分のものであるかを確認した結果、1年後は9割を超え、2年半後は8割だった。また一部を改ざんしたのも、自分のものと勘違いした者が見られたという。従って、1年を越え、発達段階をまたいだ縦断調査を行い、過去の自我体験の報告がどのように変容するか、また忘却されるかを検討することは重要である。

このように、自我体験に関する実証的研究では、基本的には調査時点における被調査者の報告内容を検討する

1) 本研究は、2004年度に名古屋大学大学院教育発達科学研究科に提出した博士論文の一部を改訂したものである。また本研究の一部は、日本心理学会第68回大会で発表された。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

のであるが、発達に伴い報告内容に変化が見られるか、劇的な記憶の変容や忘却、(意識的でない)捏造が見られるかどうかを確認することは必要である。このような点を検討するには、体験初発時に近い時期から、発達段階をまたいだ縦断調査を行うことが有効である。

自我体験の縦断調査については、天谷(2001)が、第1回調査時に小学校高学年生であった人13名を対象に、第1回調査から1年後に調査を行っている。その結果、第1回調査における自身の体験内容を忘却した人は13名中2名であった。そして、第1回調査と異なる内容を報告した人は13名中3名であった。それ以外の8名は、第1回と第2回調査では同じ報告をした。しかしその中には、説明の詳しさによって、第1回調査では自我体験とみなされたが、第2回では自我体験とみなされなかったり(1名)、逆に、第1回調査では説明が不十分であったが、第2回では新たに自我体験とみなされたりした人(1名)がいた。また、カテゴリの分類結果の変化から見ると、第1回と第2回で同じカテゴリに分類された人は9名、異なるカテゴリに分類された人は4名であった。以上の結果から、第1回調査後1年の間隔が開いた場合、半数以上は同じ報告をする傾向が示唆された。また、第1回と第2回調査双方で同じ自我体験を報告した4名のうち3名は、第1回よりも体験内容が発展したと報告した。

本研究では、この天谷(2001)の第2回調査時からさらに3年3ヶ月後に縦断調査を行う。小学校当時に自我体験を報告してもらうことと、中学校・高校時に報告してもらうことは、当人にとっての位置づけや重要度、記憶の状態等について、相当の違いが見られることが予想される。自我体験については、ごく最近に経た体験を報告してもらう場合、当人にとっての重要度も高いと思われる。臨場感のある報告が得られる可能性が高いと思われる。しかし、初発体験から学校段階が移行する場合、当人にとっての重要度にも変化が見られることが予想される。時間の経過によって、より重要度が増したり、逆に重要度が低下して忘却に至ったりする可能性があるだろう。以上から、本研究では、3年を経た後学校段階が移行し、3年前に報告された体験がどのように語られるのかを調査することで、意味付けの変化、時間を経ることによる自我体験の報告の変化を検討することが目的である。また第2回調査において、体験を十分に報告できなかった人については、新たに自我体験を報告するかどうかを検討する。これにより、今までの横断的な方法による自我体験研究結果の捉え方もより明確化することができる。

## 方法

### 被面接者

第1回調査(1999年3月)と第2回調査(2000年3月)に参加した被面接者のうち6名。内訳は第1回・第2回調査にともに参加した者が3名(男3名、高校2年1名、中学3年2名)、第2回調査のみ参加した者が3名(男2名、女1名、高校1年1名、中学3年1名、中学2年1名)であった。実施時期は2003年6月から7月にかけてであった。

### 手続き

質問紙に記入してもらった後、1対1の半構造化面接を行った。半構造化面接では、自由記述内容や、質問項目で高い評定をつけた項目について、詳しい内容を質問した。面接における質問内容は、質問紙において「思ったことがある」とマルをつけた項目(自由記述において言及した項目を含む)について、体験内容の詳細、体験の初発時期、体験の状況、体験に至るきっかけ、体験の深刻さ、体験時の感じ、体験回数、体験期間、体験前後の違い、体験を経た意味、体験の印象、他者への開示の有無を質問した。ここまでは、第1回調査、第2回調査と同じ手続きである。その後、第1回調査・第2回調査における面接内容をまとめたものを、被面接者に提示した。そして、今回の報告内容と同じか否か、その後発展があったか、その後新たに思ったことがあったか、体験への意味付けの変化について質問した。面接内容は被面接者の承諾を得て、テープに録音した。

### 質問紙

第2回調査において使用した自我体験についての質問紙と同じものを使用した。質問項目15項目(付表参照)に対し、3件法(思ったことがある、何となくあったような気がする、思ったことがない)のいずれかにマルをつけてもらった。その後、一番思ったことのある項目について、自由記述を求めた。

### 結果の整理

面接内容を録音したテープを逐語録にした。そして面接内容が自我体験にあてはまるかどうか分類した。各被面接者を「体験群」「あいまい群」「未体験群」の3群のいずれかに分類した。「体験群」とは、質問紙の自由記述内容や面接での発言が、自我体験とみなせる群である。「あいまい群」とは、質問紙の自由記述内容や面接での発言が、自我体験とみなすにはあいまいであったり、言語表現が不十分であったりする群である。「未体験群」

とは、質問紙・面接双方において、自我体験に相当するような体験について「思ったことがない」と発言したり、自我体験ではない体験について話したりした群である。また、面接内容が自我体験にあてはまるかどうか以外に、第1回・第2回の面接内容を覚えているか、その後の変化等について、項目ごとにチェックシートにまとめた。そして、面接内容が自我体験に当てはまるかどうかについては、筆者と大学院生（1名）で独立に評定を行った。その結果6名中5名の評定が一致した。評定が一致しなかった1名は、ケースの情報不足の程度に関する評定が一致せず、一方があいまい群、他方が未体験群と評定した。従って、体験群かそうでないかという評定に関しては、不一致は見られなかった。

## 結果と考察

### 1. 自我体験かどうかについての分類結果

今回の調査において、6名のうち3名が体験群に分類され、1名はあいまい群に分類され、2名は未体験群に分類された（Table 1 参照）。

### 2. 第1回調査・第2回調査との比較

今回の被面接者の中で、第1回調査では参加した3名のうち2名は体験群に分類され、1名はあいまい群に分類された。そして第2回調査では、6名のうち3名は体験群に分類され（第1回調査参加者はうち1名）、1名はあいまい群に分類され（第1回調査参加者はうち1名）、2名は未体験群に分類された（第1回調査参加者はうち1名、Table 1 参照）。そして第3回調査では、第1回調査以降、3回にわたって同じカテゴリに分類された人は、1名も見られなかった。しかし、第1回調査と第2

回調査に参加した3名は、第2回調査時点において、第1回調査と第2回調査の報告内容は同じ話であると報告した。従って、ここからは第2回調査のみと今回の調査の比較について検討する。

今回の調査において第2回の報告内容（体験群に分類されていた）を完全に忘却し、未体験群に分類された人は2名であった（ケース1、ケース5。具体的内容は順に Table 2, Table 6 参照）。ケース1は、今回の調査において、第2回調査時と同じ質問項目について報告したが、第2回調査時とは異なる内容を報告し、自我体験とはみなされなかった。そして第2回調査の面接内容を提示後はじめて、当時の自身の体験を想起した。第2回調査時以後、自我体験の印象は薄くなっていったようである。ケース5については、第3回調査時、第1回・第2回調査時の自身の自我体験を忘却しており、過去の面接内容を提示後も、思ったことがないと言いそうであることを報告し、自身の体験をほとんど想起できなかった。

そして第2回調査において未体験群に分類され、今回の調査において体験群とされた者が1名見られた（ケース2、具体的内容は Table 3 参照）。ケース2は、第2回調査後（小学校高学年頃）、新たに自我体験を経たと考えられる。

また、第2回調査と今回の調査の2回とも体験群に分類され、かつ報告内容が同じ話であった人が1名見られた（ケース3、具体的内容は Table 4 参照）。そして、2回ともあいまい群に分類された者が1名見られた（ケース4、具体的内容は Table 5 参照）。しかしケース4は、第2回調査とは報告内容が異なり、第2回調査内容を筆者が提示した後に、その内容ははじめて想起した。

さらに、今回の調査において体験群に分類され、第1

Table 1 縦断調査による報告の変化

第1回調査 (99年3月)				第2回調査 (00年3月)				第3回調査 (03年3月)					
ケース	学年	性別	自我体験	ケース	学年	性別	自我体験	第1回の話と比較して	ケース	学年	性別	自我体験	第1回・第2回の話と比較して
1				1	5年	女	○		1	中3	女	×	忘却
2				2	4年	男	×		2	中2	男	○	第2回以降新たに体験
3				3	6年	男	○		3	高1	男	○	第2回と同じ話
4	4年	男	○	4	5年	男	△	同じ話	4	中3	男	△	第1回・第2回と違う話、第1回・第2回の内容は言われて想起
5	6年	男	△	5	中1	男	○	同じ話	5	高2	男	×	第1回・第2回と違う話、第1回・第2回の内容は完全に忘却
6	4年	男	○	6	5年	男	×	同じ? (忘却)	6	中3	男	○	第1回と第2回が同じかどうかあやふや、第1回・第2回と今回は「似てるかな?」& 違う話

注) ケース1, 2, 3は第1回は不参加。

自我体験の評定は、その時点での報告内容が自我体験か否かを示すものである。

「同じ話」とは、第1回または第2回の報告内容と、その時点での報告内容が同じ話かどうかをケースに直接確認したものである。

自我体験に関する縦断面接調査

Table 2 ケース1 (中3女) の報告内容

	第2回	第3回時のコメント	第3回
項目番号 自我体験か 体験内容 (自由記述 含)	7 ○ なんか、今ここにいるっていうか、 自分がそこに生まれて来ている感 じが少し不思議に。…… (いたの は何でだろうって考えて、でも自 分はいるから、うれしいわで終わ り)		7 × うまく行かないことだらけの時、 なんでここにいるんだろうと思っ た (自由記述)。(いやなことじゃ ないときに、素朴にというであれ ただ、ふと、何だろうみたいな 感じで同じようなことを思うこと はある?) あんまりそれはない。
下位側面 体験年齢 意味付け	存在への問い・起源・場所への問 い 覚えてない。小学校入ってから。 少し何でもがんばろっかなとか、 そういうふうに (自分がいるのが うれしいなと思ったから)。		中学2年生か3年生
第1回・第2回と同 じかどうか 前回の調査を覚えて いるか 前回話した内容を見 て 前回以来今回まで新 たに思ったか 前回以来、意味付け の変化 前回以来の重要性に ついて		— あんまり覚えてない。アンケート したのは覚えているけど、何を話 したまでは覚えてない。 でも、読んでると、何かそんな感 じかなくて。 (この時に話して以来、多分ずっ と思わなくなったのかな?) うん。 思わなくなった。 多分書いて、しばらくたってから、 もう忘れたと思う (笑)。 (あんまり重要なことでは?) 重 要では…… (ああ、思いついたわ、 みたいな) ああ、そんな感じ。 (印象もどんどんうすれて) うす くなくて。	

注. カッコ内は筆者の発言

回・第2回調査と似た話と、それとは異なった話 (第2回調査後新たに体験したと思われる) をした人が1名見られた (ケース6, 具体的内容は Table 7 参照)。ケース6は、第2回調査の報告内容が非常に不十分であり、第2回調査当時、未体験群に分類されていた。また第2回調査当時、第1回の報告内容を忘却していたが、今回の調査における報告内容が、第1回と第2回の報告内容と似ているかもしれないと報告した。このケースは、第1回調査時から一貫して、自身の体験を言葉で表現しづらいたと報告していたこともあって、自身の報告が過去の報告と同じものなのか、判定しづらかったと考えられる。また、第1回・第2回調査時からある程度時間が経ったことで、過去の自身の体験が整理されたのかもしれない。

### 3. 自我体験の当人にとっての重要度や位置づけの変化

第2回の報告内容を覚えていたケース3と、第2回に未体験群に分類され、第2回調査時以降に新たに自我体

験を経たと思われるケース2を除く4名は、第3回調査時に第1回・第2回調査時の報告内容を忘却していた。よって、この4名については、自我体験の当人にとっての意味付け以前の問題であった。この4名は、今回の調査において、自身の報告内容が、その後発展もなく、意味もなく消えたと報告した。

第2回調査において、未体験群に分類されたケース2は、第2回調査時以降今回の調査に至るまでに、「自分のことがよくわかってきたような気がする」と報告し、自分について考える機会が増えてきたようであった。しかし自身の自我体験について、さらに3年後に質問されたとしたら、「覚えてなさそう」と報告した。

また、第2回と今回と同じ自我体験を報告したケース3は、自我体験の位置づけについて、「多分発展してないと思うんですけど、ちょっとは発展したかな。なんかその年重ねて」と報告した。そして、自身の自我体験について、さらに10年後に質問されたとしたら、「多分覚えている」と報告した。しかし、自身の自我体験につ

Talbe 3 ケース 2 (中 2 男) の報告内容

	第 2 回	第 3 回時のコメント	第 3 回
項目番号 自我体験か否か 体験内容 (自由 記述含)	なし × (こういうこ とを考えたこ とは?) ない。 (難しくはな いけれど, 考 えたことがな い)		13, 15 ○ (北朝鮮に生まれなくて よかったって思った以外 で, 何でもとも日本に 生まれたんだろう, 別に 日本でなくてもよかった のに, みたいな感じでは 思わない?) 少し思った ことがある。…なんだろ うって思って, 不思議, まあいいやって思って。
下位側面			2 △ ときどきホラー映画など を見ていて, 自分は死ん だ時どこへ行くのだろう っていうのをけっこう考え ます。……(天国とか地 獄とかそんな感じ?) そ ういう感じ。……(死ん だらなくなるかもしれない のが怖い? 死ぬこと自 体がこわい?) なくなる っていうのが怖い。(普通 の天国・地獄以外にも, そういう自分の考えてい ることとか, そういうの がどっか行っちゃうのか なとか, そういう話なの かな?) はい。
体験年齢 意味付け			12, 13, 6 ○ (今の自分の体がいい悪 いは別として, どうして 何でたまたまこの体なん だろうか? みたいに思う ことは?) ある。(それ は, いやだな, という時 と, くっついている?) くっついてない。……そ の後, こういう体なんだ から, って自覚して, で, 忘れて。そういう感じで。
第 1 回・第 2 回 と同じかどうか 前回の調査を覚 えているか		起源・場所への問い	起源・場所への問い (△) 存在への感覚的違和感・ 存在への問い (△)
前回話した内容 を見て		小学校の時。高学年。 意味はなかったと思う	中学校入ってから -
前回以来今回ま で新たに思った か			中学校入ってすぐ最初く らいあまりないです。
前回以来, 意味 付けの変化			
前回以来の重要 さについて			

注. カッコ内は筆者の発言

いての意味は「意味とか, そういうの, 考えたことがないですね。」とも報告している。印象は強いが, それほど自身にとって意味のある体験ではなく, 「ただ自分がふと思っていること」という位置づけがなされているようであった。

以上から, 自我体験は, 初発時以降ある程度の年月を経た場合, 当人にとっての位置づけは, より薄くなるか, あまり変化しないものであることが多い可能性が示唆される。自我体験は, 大部分の人にとっては, ある特定の時期に特有に見られる, 「ちょっと変わった考え事」といった位置づけなのかもしれない。

なお第 1 回・第 2 回調査を以前に行ったこと自体を覚えていたのは, ケース 1, 3, 4 で, ケース 5, 6 は,

第 2 回調査のみを覚えていた。また, 以前の調査で自分が何を話したかを覚えていたのは, ケース 3 のみであった。そして, 6 名全員について, 筆者が第 1 回・第 2 回調査で質問をしたことにより, 彼らが自我体験に関わる内容を考えてたり, 刺激を受けたりしたことはないと報告した。

### 総合考察

#### 1. 時間的経過による自我体験内容の報告の変化

本研究の結果は, 対象人数が少ないので, 一般化することはできない。しかし, 小学校高学年時における調査以降, 3 年余の間隔があいて学校段階が移行した場合, 過去の自身の自我体験を覚えており, 同じ報告をする人

自我体験に関する縦断面接調査

Table 4 ケース3 (高1男) の報告内容

	第2回	第3回時のコメント	第3回
項目番号 自我体験か否か 体験内容 (自由 記述含)	3, 6 ○ 勉強している時、ふと自分はい たいなんなんだろうと思ったこと がある(自由記述)。何となく自分 がなんか、なんなんだろうって いう。……自分自身がなんなんだ ろうって。…何も言わんとただその ことをずっと考えて、それであ ってなってまた元に戻って。……う ーん、誰なんだー？自分の存在が なんなんやろうって。……ほんとに 存在するのかって。		3, 6 ○ 言葉で表しづらい。何かしていたら、無 意識に何か、あ、オレなんか無意識にこんな ことしてる、オレってなんなんやろうって、 何かしてる、例えば勉強してたりして、勝 手になんか、無意識に、自分ってなんなん やろうなって考えながら、自分は何かをし ていて、なんなんかなあって考えている うちに、やっぱり戻って、普通に戻って。…… ふと自分でなんか、自分でなんかとか、 なんかそんなん。……自分は何だろうから発 展すると、いろいろ広がるんですけど、例 えば宇宙、何だろうとか、なんなんかな って、なんかその、大きくなって行って、結 局そんなことを考えて、キリないじゃん、 で終わる。……宇宙って何だろうって考 えることが、きりがなくなってる。
下位側面 体験年齢	存在への問い 覚えてない。小学校の4年生くら いかな。	一番あったのは5年生あたりって 書いてありますね。小学校の時、 そんなに思っていなかったような 気がするんだけどなあ。(中学に 入ってからの方が) 多分多いと思 いますね。	存在への問い 中1くらいかなあ。
意味付け	別にないと思う。		意味とか、そういうの、考えたことが ないですね。
第1回・第2回 と同じかどうか 前回の調査を覚 えているか	—	うん、同じ。	
前回話した内容 を見て	—	前の検査の時も、それを聞かれて、 今覚えていたんで。(前聞かれた ことというのは覚えている?) 多 分。多分同じことだったと思いま す。 うーん、多分発展していないと思 うんですけど、ちょっとは発展し たかな。なんかその年重ねて。…… (難しい言葉で考えるようになった とか? 知識が増えてきたからと か?) そんな感じかなあ。	
前回以来今回ま で新たに思った か	—	(一番よおく思っていたのは) 中 1から中2くらいですかね。その ころが、一番時間があったって いうか、なんか。(受験とかやらな きゃいけないことが) 逆に増えて きて、集中しなくちゃいけないし。 ……今カンベキないですね。今ヒ マがないです。	
前回以来、意味 付けの変化	—	かわってないと思います。	
前回以来の重要 さについて	—	でも何かその、質問書いてある紙 オレ思ったこと、書いてあるって、 でなんか、大事なことっていうか、 なんかそういうののなかなって いうのは、思ったことがあります。	

注. カッコ内は筆者の発言

Talbe 5 ケース 4 (中3男) の報告内容

	第1回	第2回	第3回時のコメント	第3回
項目番号 自我体験か否か 体験内容 (自由 記述含)	9, 3 ○ 自分の顔を見たとき, 自分 はなぜ自分なのだろうと思っ た (自由記述)。……とい うか, 他の人は, 自分の顔 を鏡じゃないと見れないか ら, 他の人も一何か一わか らん。(口ではいえない?) うん。	なし △ 思ったことない。自分は自 分。(自分が何でいるんだ ろうとか, そういうのを不 思議に思うとか, そういう ことはない?) 時々かな。…… 自分なんやなって, これは, 他の人じゃないんやなって。 ……なんでだろうとは思わ ないが, 自分だというのは 思う。	(第1回の内容。自分の顔 を鏡で見た時) あ, それは ちょっと覚えてる。……な んで一みたいな。	3 △ (これは何となくあったよ うな気がする?) それだけ。 (具体的にどういう風に思っ たとか, そういうことは?) うーん, 何もあんまりない。 …… (どうい風な言葉で 思ったとか) いや, 何とな く, 頭の中で, ちょっと感 じただけ。……友達といろ いろあったときとか, そう 思った。……なんかそんな 考えたかなって, 何か。 存在への問い (△)
下位側面	存在への問い・存在への感 覚的違和感	存在への問い (△)		
体験年齢	3年生くらい	(小学) 2年か3年の時。	うーんー。ふと思った。 最近はないけど。…… 小学校までかなあ。	
意味付け	—	特にない。		あんまり。
第1回・第2回 と同じかどうか	—	(去年の話は今日話してく れたのと同じ話かな?) 大 体かな。		
前回の調査を覚 えているか	—	あまり覚えてない。……こ んなこと言ったんかなーっ て感じ。(去年の時の方が 覚えていた?) うん。	(調査をしたということは) 覚えてる。(何をしゃべっ たかは) そこまでは。	
前回話した内容 を見て	—		(第1回の9番は) うーん, 全然覚えてない。……うー ん, 思ったんかなー。(思っ たことあったんだよ, って 言われても, 何かあまり思 い出せない?) あまり。	
前回以来今回ま で新たに思った か	—		(第1回の内容について) それ以来あんまり考えてな い。(今言われて思い出し た?) 今言われて。うん。 (ずーっと忘れていた?) ずーっと……忘れてた。( 5年生のときには, 自分は 他の人じゃなくて, 自分な んだというのを思うと書い てあるけど, 今はどう?) うーん, 最近はない。	
前回以来, 意味 付けの変化 前回以来の重要 さについて			— —	

注. カッコ内は筆者の発言

自我体験に関する縦断面接調査

Talbe 6 ケース 5 (高2男) の報告内容

	第1回	第2回	第3回時のコメント	第3回
項目番号 自我体験か否か 体験内容(自由 記述含)	特になし △ 思う。存在が不思議。 ……うーん。	8, 15, 12 ○ 自分は本当に自分か?とわ からなくなった。アニメと かニュースで、クローン人 間が出てきたとき、自分も クローンじゃないか?と思っ た(自由記述)。他に自分 みたいな人がいたら…(15, 12番は)自分はどこから来 たのだろう。どこから来た んやろうって。どこから? うーん。最初は他の時代に 生まれていたらどうなって いたんだろうというのを友 達とかなり長く話して、ど んどん。…(なんでこの体 を選んだのかとかも、つが なってくる?)この体が、 えっと……どこから来たの だろう。	何か言ったかもしれん。何 か、クローンってのは言っ たかも。……ああ、友達と こういう話をしなくなった んで。(中学校1年の後に は)あんまり出てこないで すね。だんだんなくなって いった。……(リアルな感 じでは全く覚えてない?) ない。(これなしで、こう いうことを思ったことがあ りますかって聞かれたら、 「ないです」って言いそう な?)うん、言いそうな勢 い。	9, 11, 12, 13, 14 × (今の自分よりも、もうちょ っといいというか、そういう のがいいなと思った時に) そうそうそう。(別に自分 でも他の人でもよかったん だけど、何か自分は他の人 じゃなくて、自分なんだろ う、とこう普通に思うとき は?)うーん、ない。…… (ネガティブなというとか れだけど、そういうのじゃ ないときに思うということ はない?)うーん、ない。
下位側面	説明不足によりあいまい群。	存在への問い(△)・起源・ 場所への問い		
体験年齢	—	小学校高学年	(一番よくあったのは、今 から振り返るといつになる かな?)この時期が一番。 (小学校6年の?)うん。	
意味付け	—	ない。		
第1回・第2回 と同じかどうか		同じ内容です。(去年のこ のころから、久しぶりだっ た?)久しぶりでした。	(今回は、前回の話とは) 別です。	
前回の調査を覚 えているか			(調査をしたということは) 覚えてる(今回が3回目) 3回目?中学校で、何かし たというのしか、覚えてな い。(どう答えたとか、そ ういうことは)覚えてない。 (これはスコーンと忘れて?) スコーンと。消えて。(あ んまり思い出せない?)う ん。	
前回以来、意味 付けの変化		(意味が変わったとかそう いうわけではない?)うん	(この時も、あまり印象に 残る考え事では)ない。考 えてもあんま、どうにもな るもんじゃないし。	
前回以来の重要 さについて				

注. カッコ内は筆者の発言



Table 7 ケース6 (中3男) の報告内容

	第1回	第2回時のコメント	第3回時のコメント	第3回	
項目番号 自我体験か否か 体験内容 (自由 記述含)	3, 6, 1 ○ 鏡うつった自分 をみて。なぜこん なところにいるの だろう。自分は 何だろう(自由 記述)。…… 自分はどっから 来たのか。 (うまく口で いえない?) うん。	13, 14 × クラスの人の顔を 見ているとき(自 由記述)。顔を見 ている時に、いろ んな顔がいるな って。		8, 5, 3 ○ (具体的にその時の言葉で言う と)うん、……っと難しい。…… (自分は本当に自分か、と思っ て、同じことをグルグル考える 感じ? 本当に自分か、本当に自 分かって?) うん。そうですね。 (何かこう、話が発展するとか、 他のことを考えるとか?) この ことについては、もうちょっと 自分で詳しく考える。(具体的 には?) えー、(上手くいえない ?) ですね。……(自分につ いていやだなとかかそういう時 じゃなくて、特になんだろう、 ただ不思議、そういえば不思議 みたいな感じで思うのかな?) ああ、そうですね。……(考え ると、こんがらがってくるとい うか、そういうー) こんがらが りますね、考えると。……(ま さにこの言葉(8番)を思った?) うーん、似てる。いっしょかな。 存在への問い	4, 2, 7 ○ (始まりは)4番。…… 鏡かな、鏡。鏡にうつ す自分見て、自分は誰 だろうって。(その後 に、どこへいくんだろ うとか、存在そのもの が不思議だとか、その 場で思ったのかな?) は、そうですね。…… (説明しづらいかんじ?) しづらいです。
下位側面	存在への問い、 起源・場所へ の問い			存在への問い、存在へ の感覚的違和感(△)	
体験年齢	幼稚園	—	(幼稚園かどうかま では)ようわかりま せん。	中2 小学校中学年	
意味付け	—	—		意味はなかった。 ないですね。	
第1回・第2回 と同じかどうか	—	(去年の話と)同 じかな。	似てるかなあ? どう だろう。……あやふ や。……もう忘れちゃ った。		
前回の調査を覚 えているか		去年の話はあんま り覚えてない。	覚えてます、覚えて ます。(自分がどう いうことを話したと かそういうことまで は?) 覚えてないで す。(1回目の4年 生の時は覚えてる?) 全然。(2回目?) うん、こっちの印象 強かった。		
前回話した内容 を見て		違う。(おんなじ かどうかよくわ からない?) うん。			
前回以来今回ま で新たに思った か			(こういう風に聞い たときよりも後に、 同じ風に思ったのか な?) 6年生の時、 あったかなあ。 — (忘却)		
前回以来、意味 付けの変化 前回以来の重要 さについて			— (忘却)		

注. カッコ内は筆者の発言

は少ない可能性が示唆される。そして、過去の体験を完全に忘却する人も少なからず存在するようである。天谷(2001)の1年の間隔をあけた縦断調査においては、たとえ普段その内容を忘れていたとしても、質問された場合には、説明の十分不十分さの違いはあるが、ある程度自身の過去の自我体験を想起できることが示されていた。しかし3年の間隔があき、学校段階が移行すると、印象的でない自我体験を持つ人にとっては、その後印象が薄くなっていくものようである。また、自我体験の問いに取り組んだピークを過ぎた人についても、当時の内容と同じものについての記憶が想起しにくくなる可能性が示唆される。以上から、自我体験については、当人が頻繁に体験している時期にある程度近いが、印象が強いものでないと、その後収集することが困難になってくる可能性が示された。自我体験の収集は、小学校後半から中学にかけての時期を対象にすることが、内容について、より実態に沿ったリアルな報告を得られる可能性が高いと考えられる。

## 2. 時間的経過による自我体験の意味づけの変化

自我体験の意味付けについて、天谷(2001)の1年の間隔をあけた縦断調査からは、小学校後半から中学1年という時期においては、体験の意味を考えることはあまり見られなかった。しかし、本研究の結果からは、自我体験が「普通の考え事」に近い位置づけの場合、体験の意味を明確化できる年齢になると、自我体験そのものの印象が薄れてくる可能性が示唆された。その場合、自身の自我体験の意味を明確化できないまま忘却されることが多いようである。宮脇(1986)は、小学校5・6年の時期について、「それまでの体験を、新しく獲得しつつある自我の内省的働きによって、自分なりに再構成し、意味づけていく過渡期」と述べている。この宮脇(1986)の視点から考えてみると、小学校後半の時期には客観的に自身の体験を見つめたり、その意味を考えたり、自分の中で反芻して位置づけたりするということまでは及ばず、もう少し後の時期にならないと、体験の意味が明確にならないと考えられる。従って、自身の自我体験が印象的であったり、継続して考え続ける人にとってのみ、その後体験の意味を考えることができるものようである。

## 3. 未体験群の取り扱い

天谷(2001)においては、1年の間隔があいた場合、自身の体験を忘却していたのは、13名中2名であった。本研究において3年余の間隔があいた場合、6名中4名に忘却が見られた。あまり印象的でない自我体験を経た

場合には、自身の自我体験を完全に忘却する可能性がある可能性が示された。

また、この3年余の間に、新たに自我体験を報告するケースが見られた。ケース2とケース6は、中学校入学以降に自我体験を経ており、これらのケースについては、今回の第3回調査が、自我体験の収集に望ましい時期であったと考えられる。このケースについては、小学校高学年時に調査を行うと「未体験群」に分類されることとなる。

以上から、自我体験の収集を行い「未体験群」に分類された場合、一貫して「未体験群」に分類されるケースだけでなく、その調査後に新たに自我体験を経るケース、自我体験の初発から3年以上の時間が経過して忘却しているケースが含まれている可能性が示唆された。自我体験の初発時期にバラツキが見られる天谷(2002, 印刷中)の結果とあわせると、自我体験を最大限多く収集できる年齢を限定することは難しいと考えられる。しかし少なくとも、小学校後半から中学生を対象とすることが、より多くのリアルな自我体験を収集できる可能性が高い。また天谷(2002, 印刷中)の調査結果においては、自我体験は約半数の人に見られる可能性が示されたが、本研究結果により、過去に(印象的であれ、印象的でない場合であれ)自我体験を経た人は、さらに多い可能性も考えられる。

## まとめ

本研究の結果、対象人数は少ないながら、第2回調査時から3年余の間隔をあけた縦断調査により、学校段階が移行した場合、自身の自我体験の印象が薄くなり、忘却する可能性が高くなること、その場合自身の自我体験の意味付けもされないまま忘却されてしまうことが示された。そして、「未体験」とされる人の中にも、自我体験を経た人が含まれている可能性が示唆された。従って、大学生を対象とした自我体験の調査だけでなく、中学生を対象とした自我体験の収集においても、その体験率や意味付けの検討には慎重になるべきであると考えられる。

## 引用文献

- 天谷祐子 2001 自我体験に関する縦断研究—小学校高学年生・中学1年生を対象として— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)第48巻, 97-106.
- 天谷祐子 2002 「私」への「なぜ」という問いについて: 面接法による自我体験の報告から 発達心理学

- 研究, 13, 221-231.
- 天谷祐子 印刷中 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, 印刷中.
- Barclay, C.R. 1986 Schematization of autobiographical memory. In D.C. Rubin (Ed.) *Autobiographical memory*, 82-99. New York: Cambridge University Press.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学—自分探しへの誘い—サイエンス社
- 北村晴朗 1977 新版自我の心理 誠信書房
- Linton, M 1986 Ways of searching and the contents of memory. In D.C. Rubin (Ed.) *Autobiographical memory*, 50-67. New York: Cambridge University Press.
- 宮脇恭子 1986 自我発達における小学校中学年の位置づけ(2): 自我体験度を通して 日本教育心理学会第28回大会発表論文集, 372-373.
- Spranger, E 1932 *Psychologie des Jungendalters*. Quelle & Mayer Verlag 土井竹治 (訳), 1973 青年の心理 五月書房
- 植ノ原薫 1993 同一性地位達成過程における「事象の記憶」の働き 発達心理学研究, 4, 154-161.
- 謝辞: 本研究の作成にあたり, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科村上隆教授に御指導をいただきました。厚く御礼申し上げます。
- (2004年 月 日 受稿)

付表 面接に先立って行われた質問紙の質問項目

- 
1. 自分はどこから来たのだろうか, と疑問に思った。
  2. 自分はどこへ行くのだろうか, と不思議に思った。
  3. 自分は何だろう, とふと思った。
  4. 自分はだれだろう, と考えた。
  5. いったい何が「自分」なのだろうか, とわからなくなった。
  6. 自分の正体って何だろう, と不思議に思った。
  7. 自分の存在そのものが不思議だ, と思った。
  8. 自分は本当に自分か? と, わからなくなった。
  9. 自分はなぜ自分なのだろうか, と疑問に思った。
  10. 自分が自分であることが不思議だ, と思った。
  11. だれでもなく, どうして自分なのだろうか, と考えた。
  12. なぜ私はこの体をえらんだのか? と不思議に思った。
  13. いろんな人がいるのに, なぜたまたま私なのだろうか, とふと思った。
  14. 私が私でなく, 他のだれかとして生まれてもいいのに, どうして私となっているのだろうか, と不思議に思った。
  15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく, たまたま日本の, この時代に生まれたのか, わからないなあと思った。
-

ABSTRACT

“Ego-experience” after 3 years: An interview-based longitudinal study

Yuko AMAYA

This paper reports on research regarding “ego-experiences,” which appear from post childhood to pre adolescence, occurring around the concept “I,” as in “Why am I ‘I’?,” “Why do I exist?,” “Where did I come from?,” or “Why was I born at this particular time rather than at a different point in time?” The purposes of this second longitudinal study, based on interviews with six participants three years after the first study, were as follows: to examine any changes reported by the participants re their ego-experiences and the meanings thereof; to examine the extent to which participants had forgotten their previously reported ego-experiences; and to obtain the first reported ego-experiences from those who had not reported any at the time of the first longitudinal study. The results indicate that 2 out of the 6 participants had forgotten their previously reported ego-experiences; 1 out of the 6 reported the same ego-experience as in the first longitudinal study, but had not thought about the meaning of that ego-experience; and another 1, who did not report at the first longitudinal study, reported an ego-experience at the second one. Another 1 out of 2 who had reported ambiguous feelings at the first longitudinal study again reported ambiguous feelings in this study, while the other reported an ego-experience the meaning of which he had not considered. It seems likely that ego experiences can readily be forgotten over a three-year span of time, particularly when there is a developmental shift. It is also possible that articulating the meaning of ego experiences is not a common occurrence.

Key words: ego-experience, longitudinal study, interview